

この国はどこへ行こうとしているのか

件名は毎日新聞夕刊「特集ワイド」のタイトルである。「平和」の名の下に、という見出しもつけられている。「平和安全法制整備法案」に「国際平和支援法案」。安倍政権は国会に提出した安保関連法案に「平和」と冠したが、審議を通じてその不透明さが暴露され「戦争に巻き込まれる」との懸念が広がる。この国はどこへ向かうのか。私たちは今、何をすべきなのか—識者と考えたいと、6月2日から連載は始まった。

最初の識者は、作家の高橋源一郎さんである。作家は意外なほど明るい顔をしていた。記者はふと、4年前を思い出す。東日本大震災の直後、社会の雰囲気巡って話を聞くと、眉間にしわを寄せ「ちょっといやな感じ」と繰り返した。時代の不透明感はむしろ強まっているとも言えそうなのに、この明るさは何だろう。この4年間、民主主義の根本を知ろうと、18世紀のフランスで活躍した哲学者ルソーの「社会契約論」を精読し、古代ギリシャの統治制度に関する本なども渉猟した。そうして見えてきたのは「個人の多様性を認め、大事にする精神」だ。3年前、民主党中心の政権が「決められない政治」と指さされて退場し、「決められる政治」を掲げる安倍晋三政権が誕生した。その「決められる政治」が憲法解釈を変え、法律を変え、「戦争をする国」に変えようとしている。「多数決で勝った人が総取りで、勝手に憲法を解釈してもいいし、力で押して法律を変えてもいいんだよ」というのは民主主義でもなければ法治国家でもない。それを独裁制とか王制と呼ぶんです」「決められる政治」の化けの皮を容赦なくはがす。独裁制はその下で暮らす人々にとってある意味、楽だ。自分で考えなくても誰かが決めてくれるし、時には失政の責任すら取ってくれる。それでも私たちを含む多くの国は独裁制を嫌悪し「民主主義のようなもの」を守ろうとする。「自分の意見を持ち、他人の意見も聞く。その作業の繰り返しが人を成長させることを私たちが経験的に知っているからだと思います」

作家 高橋源一郎さん



民主主義への信頼とともに高橋さんの希望を強く支えているのが「国や政権が何をしようが、自分の居場所、新しい共同体をつくろうとしている人たち」の存在だ。高い場所から国を見下ろせば、人々は思考停止しているようにも見える。だが草の根では、自らの頭で考え、他者と話し合いながら生きている人たちがたくさんいることをこの4年間に知ったという。その間の時評や思索をまとめた新刊には「ぼくらの民主主義なんだから」とのタイトルをつけた。「未来は混沌としている。でも、どんな国になっても、自分で道を切り開く人は必ずいる。だから絶望することなんかないですよ」

(2015年6月9日)